第三章　六条の貴婦人の物語　初秋の物語

［第一段　霧深き朝帰りの物語］

秋にもなりぬ(やがて秋になりました)。人遣り非ず(ひとやりならず、誰に如何と言われた訳でもなく源氏は一人)、心づくしに(季節の寂しさに)思し乱るる(物思いに耽る)ことどもありて(日々を重ねて)、大殿(おほいどの、養父の左大臣家で妻も住まう)には、絶え間置きつつ(久しく出向かず、妻の姫君が源氏を)、恨めしくのみ思ひ(恨めしく思ってばかりいると)聞こえたまへり(いう話を源氏は伝え聞いていらした)。

六条わたりにも(六条辺りに住む女にしても)、とけがたかりし御気色を(心を許し兼ねていた様子を)おもむけ聞こえたまひて後(懇ろに絆した後は)、ひき返し(源氏が手の平を返した様に)、なのめならむは(並の女と見ているのは)いとほしかし(可哀相だった)。されど(情交して近く見知れば)、よそなりし(余所だった＝遠く憧れる)御心惑ひ(恋焦がれ)のやうに、あながちなる(執心する)事はなきも(事が無くなるのは)、いかなること(如何にも止むを得ない事)にかと(だろうかとも)見えたり(思われます)。

女は(この女の御方は)、いと(とにかく)ものを(何でも)あまりなるまで(度を越して)、思ししめたる(思い詰める)御心ざまにて(御性格なので)、齢(よはひ)のほども似げなく(また源氏よりは年上でもあることから)、人の漏り聞かむに(人の陰口では)、いとど(非常に)かく(このような)つらき(辛い)御夜がれの寝覚め寝覚め(一人寝に寝付かれず)、思ししをるること(うなされる夜を過ごす事が)、いと(とても)さまざまなり(多いようだった)。

霧のいと深き朝(あした)、いたく(ひどく)そそのかされ(帰りをお急ぎに)たまひて(為されて)、ねぶたげなる気色に(眠たそうに)、うち嘆きつつ(溜息交じりで)出でたまふを(六条の家を出て行く源氏を)、*中将の御許(おもと、中将という其の家の女房が)、御格子(みかうし)一間上げて(格子の蔀戸を一間だけ引き上げて)、見たてまつり送りたまへ(女主人に源氏を御見送りさせよう)、とおぼしく(として)、御几帳(みきちゃう)引きやりたれば(几帳を引き開いていたので)、御頭(みぐし)もたげて(女主人の六条の女は顔を上げて)見出だしたまへり(源氏を御見送りし為さった)。　*女主人が大女将(おおおかみ)で、其の側近が中女将(なかおかみ)か。

前栽の(せんざい、前庭に植えた花々の)色々乱れたるを、過ぎがてに(足を止めて)やすらひたまへるさま(眺める源氏の姿は)、げに(実に)たぐひなし(飛び抜けて優美だった)。廊の方へ(らうのかたに、渡廊下に)おはするに(向かうと)、中将の君、御供に参る(中将の御許が供をした)。(其の御許は)紫苑色(しをにいろ、単衣襲の色目で緑地に薄紫のカサネ)の折にあひたる(で秋らしい)、羅の裳(うすもののも、薄絹の腰飾りを)、鮮やかに引き結ひたる腰つき(美しく結び留めた腰元が)、たをやかに(しなやかに)なまめきたり(見映えしていた)。

見返りたまひて(源氏は振り向かれて)、隅の間の高欄に(廊下端に)、しばし、ひき据ゑたまへり(其の御許を少しの間控えさせて置かれた)。うちとけたらぬもてなし(其の御許の礼儀正しさ

と)、髪の下がりば(髪の額際を整えた身嗜みを)、めざましくも、と見たまふ(源氏は見事だとお感じになった)。

「咲く花に移る*てふ名はつつめども、折らで過ぎ憂き今朝の朝顔　(和歌 4-3)

「こっちの水は甘いのかしら、蝶を惑わす罪な朝顔　(意訳 4-3-1)

*「てふ名」は「という気持ち」でもあり「蝶の誰か＝女主人の許に通う源氏」でもある。それを「つつめ」るのだから、「心変わりした事を隠す」べき「立場なのだが口説きたい」という戯れ歌。「朝顔」は「この侍女の御許」だから、「過ぎ憂き＝見過ごすには惜しい」を侍女が社交辞令で受け流せば洒落た会話だが、本気で受ければ穏やかではない、いや、だからこそ洒落ているのだが。

いかがすべき(さて、どうしたものでしょう)」とて、手をとらへたまへれば(源氏が御許の手を御取りに為ると、御許は其の手を)、いと馴れてとく(然り気無く解いて説く)、

「朝霧の晴れ間も待たぬ気色にて、花に心を止めぬとぞ見る」(和歌 4-4)

「そんなに帰りをお急ぎなのは、どちらの水が匂うのかしら」(意訳 4-4-1)

と、*おほやけごとにぞ(主人の返歌の代役として)聞こえなす(切り返した)。　*「公事にぞ」と言う語り口自体に妙な違和感を覚える。この作者は時々この手の妙な言い方をする、ように思う。尤も私は古文に馴染みが無いので、ただの無知に依る勘違いなのかもしれないが、そう感じる。こういう言い方をする時の特徴は、複合的な意味を短く言い切りたい、のだろうと思う。そこで改めて此処の場の歌の遣り取りを見直してみる。私は、基本的に源氏の発句なのだから、源氏の歌意に基いて、此処の場を眺めた。女主人の目の前で侍女を口説く源氏の不埒な戯れを、秋の花が色とりどりに咲く庭先で侍女が優雅に受け流す、という趣を味わう場面と見た。其れ成りに楽しんだ心算で居たが、作者は更に引いた画面を見せる。「公事」は確かに〈侍女の女主人に仕える立場〉を強調してはいるが、読み手に〈園遊の公事〉を喚起させようとも企画している。其の喚起に促されて、(和歌 4-3)と(和歌 4-4)の情景詠みこそを見直してみる。すると再び、前庭の花々に源氏が足を止めた事から此処の場面が始まって、「秋なので蝶は居ないが美しい朝顔が咲いているね(意訳 4-3-2)」と源氏が言えば、「はい、朝霧の中に見事で御座います(意訳 4-4-2)」と侍女が答える、絵が見えた。戯事の遣り取りも、この情緒在ってのものだと作者は指摘する。いや、其の全体の美意識、其れこそ女主人の地位やらから、造園した庭師の営みまでをも含めた都文化の価値観、を忘れるなと言う作者の意図に驚かされる。同時に和歌の深みも味わえた。そして語りは、次の描写へ継なぐ。

をかしげなる(また、時に当を得た)侍童(さぶらひわらは、小姓)の、姿このましう(見た目も可愛く)、ことさらめきたる(この時とばかりに)、指貫(さしぬき、裾締め袴)の裾、露けげに(朝露に濡らして)、花の中に混りて、朝顔折りて、参るほどなど(源氏に差し上げたりする此の秋の朝庭の光景は)、絵に描かまほしげなり(絵にしたいほどの風情だった)。

大方に(遠目で源氏を)、うち見たてまつる人だに(眺め見るだけの人でも)、心とめたてまつらぬはなし(心惹かれぬ事が無い)。物の情け知らぬ山がつも(風雅を解さぬ山賊でも)、花の蔭には(花を見れば)、なほ(やはり)やすらはまほしきにや(心安らかになるものを)、この御光を見たてまつるあたりは(この源氏の美しさを目にする人々は)、ほどほどにつけて(其々の身分なりに)、

我がかなしと思ふ女を（大事な愛娘を）、仕うまつらせばやと願ひ（源氏の側仕えに就かせたいと願い）、もしは（もしくは）、口惜しからずと思ふ（人並み以上と思っている）妹など持たる人は（姉妹などが有る人は）、卑しきにても（下働きとしてでも）、なほ、この御あたりに（源氏の許に）さぶらはせむと（仕えさせたいと）、思ひ寄らぬはなかりけり（思わぬ者は無かった）。

　まして、さりぬべきついでの御言の葉も（何かの折に直接源氏から頂いた言葉を）、なつかしき御気色を見たてまつる人の（親しくお側に仕える中で）、すこし物の心思ひ知るは（幾らかでも分別の有る者なら）、いかがは（どうして）おろかに（疎かに）思ひきこえむ（する事が出来るだろうか）。（それだけに中将の御許は此の時の源氏の言葉に、）明け暮れ（毎日とは）うちとけてしも（源氏がお通いに）おはせぬを（成られないのを）、心もとなきことに思ふべかめり（物足りなく思っていたようだった）。